

■いわて文化ノート

蚕と猫と馬～養蚕をめぐる動物たち～

専門学芸員 近藤 良子（民俗部門）

昨年秋、当館総合展示室で「絵馬に描かれた猫」という小さなトピック展を開きました。また、いわて文化史展示室では養蚕業を紹介し、県内の養蚕信仰にまつわる展示において猫の絵馬を展示しております。この展示は、陸前高田市の猫淵神社より猫絵馬をご寄贈いただいたことがきっかけでした。蚕と猫には一体どんな関係性があるのでしょうか？



写真1 奉納された猫絵馬（S.23銘）／館蔵

■猫絵馬の奉納と養蚕業

かつて岩手県でも養蚕が盛だった頃、県南地方を中心に養蚕祈願のため、猫の絵馬を描いて神社に奉納する習俗がありました。この習俗は、岩手県南から福島県の養蚕地域に見られるもので、大事な商品となる繭を食い荒らすネズミを駆除するため、家で飼われていた猫に願を掛け、絵馬に描いたといえます。

日本最古の養蚕専門書である野本道玄の『蚕飼養法記』[江戸中期]には、「家々に必ず能くよく猫を飼置べし」との記述があり、養蚕農家のネズミ対策として猫を飼うことが良いと強調されています。

県内で猫絵馬が見つかっているのは、住田町の猫淵神社、陸前高田市矢作町の猫淵神社など、かつて養蚕が盛んにおこなわれていた地域と一致します。県内でも明治中頃から戦前にかけて盛んに行われた養蚕は、農家が現金収入を得るための一つの投機であり、常に期待や不安がともなうものでした。「運の虫」とも言われた蚕の飼育は、天候に左右され、まさに神頼みのところもありました。その

ため豊蚕への願いは、全国的に時代や地域により様々な展開を見せてきました。

■蚕と馬

オシラサマ



写真2 オシラサマ（貫頭衣型）／館蔵

ここで養蚕と馬の関係について見てみたいと思います。蚕の神というとオシラサマが思い浮かびます。オシラサマは、約30cmほどの桑の木などの先に、男女や馬の顔などを墨書したり彫ったりしたもので、養蚕の神や目の神、家の神、農神ともいわれます。写真2は、頭が衣から出ているタイプの貫頭衣型のオシラサマで、桑の木に馬の顔や人の顔が彫られています。この資料はかつて陸前高田市気仙町の個人宅で養蚕の神として祀られていたものです。

『遠野物語』69話には、オシラサマの起源ともいべき馬娘婚姻譚が記されています。娘と夫婦となった馬を父親が殺し、娘は切られた馬の首に乗って天に昇ってしまいます。「オシラサマと云うはこの時より成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の枝にてその神の像をつくる」といいます。オシラサマは蚕の神ともされますが、このことについて現地調査を踏まえた報告書（『いわてオシラサマ探訪』（岩手県立博物館編／2008／岩手県立博物館調査研究報告書第23冊））があります。オシラサマは包頭衣型と貫頭型の2つのタイプに大別され、その形態から蚕の神か目の神かを調査しています。地方によって、目の神であったり蚕の神であったりまちまちですが、報

告では「県北地方は「包>貫」で「目>蚕」の傾向が強く、これに対して県南地方では「包<貫」で「目<蚕」という傾向だが、複雑で割り切れない部分もかなり見られる」としています。

各地に残る養蚕信仰はオシラサマ一つをとっても様々な信仰や伝説と結びつき、多様かつ複雑な様相を呈しています。

馬は家畜として重要な存在で、曲がり屋で一つ屋根の下に人間と馬が暮らしたように大切に育てられてきました。蚕もまた、人間が飼いならした虫で、家畜のように一頭、二頭と数え大事に育てたそうです。蚕の背の模様は半月紋と呼ばれますが、見ようによっては馬の蹄にも見えるので馬蹄紋と呼ぶこともあります。蚕は脱皮を4回繰り返して繭を作り始める頃になると、胴体上部を持ち上げて静止し、糸を吐く準備を始めます。この時の様子が馬の姿形に似ていることから、身近な存在である馬が蚕と結びついたのであるとも言われています。



写真3 一関市弥栄地区養蚕農家にて撮影 H28

■蚕と猫

猫の絵馬

今回猫絵馬をご寄贈いただいた陸前高田市の猫淵神社には、比較的絵柄や墨書が見えやすい絵馬が459枚残されていました。確認できた最も古い猫絵馬は、明治11（1878）年のものでした。奉納年が読み取れるもので、明治が23枚、大正が25枚、昭和が48枚、平成が7枚あり、昭和初期から40年代のものでした。墨書で猫の絵や「猫」、「猫佛」という文字を書いたもので、猫がネズミ

を捕える絵や、猫の健康祈願、死んでしまった猫を弔う内容の絵馬も見られます。また、同じネズミの天敵という意味から蛇の絵を描いた絵馬もありました。さらに、「猫淵不動明王守護」と書かれた版木、祠の中には木彫りの猫の像も3体奉納されています。

ご寄贈いただいた絵馬を見ながら、奉納された頃の県南地域や、岩手県の養蚕業の歴史を見てみましょう。

明治政府は養蚕を国家産業として重視し、県でも養蚕業振興のため、桑苗栽培や人材の育成に力を入れました。



写真4 後向きの黒猫 (T.5銘) / 館蔵

この絵馬が奉納された大正期、県では「原蚕種製造所」(後の「蚕業試験場」)が設置され、生糸市場が活発化、生糸価格が高騰し、養蚕業が活気づきます。気仙地方には、明治から昭和初期にかけて多くの機械製糸工場が設立されています。



写真5 赤い首綱をした猫 (S.18銘) / 館蔵

昭和14(1939)年に第二次世界大戦が勃発すると、戦時下の食糧増産のため桑園面積、養蚕戸数、収繭量が激減し、米国との関係悪化で生糸の対米輸出が途絶え、製糸業界は大打撃を受けます。生糸の大部分は国内消費に回され、質より量の生産に重点が置かれるように

なりました。さらに昭和16(1941)年に太平洋戦争が始まると、あらゆるものが軍事優先となるなかで、絹は落下傘や軍服の原料として「繭も兵器なり」と言われしめるほどに養蚕業も戦争の波にのまれていったのです。

戦後、生糸の内需拡大とともに養蚕業は徐々に回復したものの、化学繊維の台頭や海外の安い生糸の流入による生糸価格の低迷、養蚕従事者の高齢化などで養蚕農家も減少していきました。



写真6 白猫 (S.61銘) / 館蔵

これは昭和の奉納年銘が見える絵馬です。昭和60年代から平成にかけてこの地区での養蚕農家は10戸を下回っているため、この頃の猫絵馬の奉納は豊蚕祈願という意味合いよりも飼育猫の健康祈願等が中心となっていったと考えられます。

養蚕農家の減少とともに、豊蚕を願う猫絵馬奉納の風習も失われていきました。現在、岩手県で養蚕を行っている農家は、18戸(H26「岩手県蚕糸統計」)のみとなっています。(参考文献『陸前高田市史』第9巻産業編/陸前高田市史編纂委員会1997年)

■森口多里『民俗の四季』にも紹介

さて、民俗学者の森口多里の『民俗の四季』(1980年)にもこの猫淵神社が「ねこぶちさま」として紹介されています。「小さな堂内には猫を思い思いの形にえがいた絵馬が乱雑に積まれ、幾枚かは正面の柱にも打ち付けられている。(略)1枚だけ三毛猫の親子三匹を描い

たものは墨と薄墨のほかには胡粉の白を用い、鈴には黄色にいろどり、ちょっとクロウトくさい絵で、昭和14年旧3月吉日(奉納者名略)とするされている。」とあり、今回ご寄贈いただいた絵馬(写真8)がこれにあたります。猫絵馬奉納については、猫の育たない家が猫淵様に参拝して堂内の絵馬1枚を借りて帰り、猫が育ったならお礼参りをし、新しい絵馬1枚を添えて返したそうで、猫絵馬の奉納枚数が多くなっている理由には、このような「倍返し」の風習があったからとも考えられます。



写真7 森口多里coll. (S.37撮影)



写真8 三毛猫の親子 (S.14銘) / 館蔵

今回、猫絵馬をご寄贈いただきました猫淵神社別当梅木力氏には、大変お世話になりました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

奉納絵馬を調査していくと、奉納者が猫を単に養蚕の神として祀るだけでなく日頃の愛嬌ある猫の姿を描いたり、死んだ猫の弔いなど様々な思いが垣間見えてきました。今回は蚕と猫と馬の関係性を見てみました。過酷な自然環境に暮らす中、人々が様々な動物の特性に霊力を見出し祈りを捧げてきたことが分かります。